

第 50 回 Society of Toxicology (SOT) 記念年会参加報告

－ JSOT ブース展示と宣伝活動 －

2011 年の SOT はワシントン DC のコンベンションセンターで 3 月 6 日から 10 日に開催された。今回は第 50 回の記念年会としての位置づけでもあり、参加者は 8,000 人（うち約 20%が海外からの参加者）を超え、開催初日には教育講演、翌日からは 200 を超えるシンポジウム、ワークショップ、ラウンドテーブルなど、安全性研究の最先端のテーマからレギュレーションに関わるテーマまで 3,100 超のプレゼンテーションが行われた。さらに恒例の開発業務委託機関（CRO）、試薬・機器業者、書籍などを合わせ 365 件の展示会が 3 月 7 日から 9 日の 3 日間にわたり同時開催された。

本学会では、幅広い研究分野の会員に興味を持たれるような以下の 6 つの大きなテーマを取り上げ、（ ）内に記したような各々のテーマに関連した具体的テーマを設定し、シンポジウムやワークショップ等に振り分けられていた。

- 1) 新規のグローバルな公衆衛生問題（21 世紀の予測的環境毒性試験や環境リスクアセスメント、食品調理により生成する毒性物質のリスクとリスク管理、遺伝子組み換え作物に導入されたタンパクのリスク評価など）
- 2) 環境と疾患（環境毒性物質への発育段階での暴露、エピジェネティクス・金属・癌、環境毒性物質に対する感受性のヒト多様性など）
- 3) グローバルな大気環境とヒトの健康（環境酸化汚染物質で誘発された肺毒性、気道の化学物質毒性の代謝的基礎など）
- 4) ヒトリスクを理解するための毒性学および疫学的証拠の統合（非化学的ストレス要因を複合リスク評価に組み込むためのアプローチ、リスク評価をより良く情報提供するための毒性学および疫学的データ統合のための新手法など）
- 5) 前臨床安全性評価の新手法（ハイコンテンツイメージングの毒性学および毒性試験への適応、神経学的疾患における遺伝子-環境交互作用のモデルとしてのヒト多能性幹細胞と神経前駆細胞など）
- 6) 毒性試験法（代替試験方法に関する国際協力、リスク評価における疫学的データと PBPK モデリングの使用など）

このように話題が豊富であり、情報収集したいテーマがシンポジウムとワークショップで同時に重なって開催されてしまうこともあった。いずれにせよ、すべてを網羅することは不可能な情報量であり、要旨を前もってよく読んでおき、意を決して会場入りするのがベストと考えられた。ポスター展示も広大な展示スペースが使われ、一通り目を通すのにも相当な時間が必要であった。日本からも多くの研究者の方々が参加・発表されており、彼らの活躍されている姿は JSOT として頼もしい限りであった。

さて今回、日本トキシコロジー学会（JSOT）では、SOT が 50 回記念年会ということもあり、学術広報委員長の堀井先生の発案により、はじめてこの展示会場（写真 1）にブースを設置し JSOT の宣伝活動を行った。JSOT の歴史上初めての試みだ。ブースには JSOT 事務局の白神さんに常駐いただき、また、JSOT の学術雑誌、The Journal of Toxicological Science (JTS) の印刷会社、仙台共同印刷の長谷川竹志様と長谷川美貴様のお二人も補助をしてくださった。



写真1 展示会場（ToxExpo）への入場口付近の様子。ポスター会場と同じフロアで開催されたため、多くの方々に入場していただいた。

ブース（写真2）はポスター展示区域の手前に場所を確保でき、ポスター展示に足を運ばれる方の通路に面する一角であったことから多くの方々立ち寄りいただいた。フロントデスクには、日本手拭いやJSOTのボールペンをお土産に用意し、JTS誌やJTS誌への投稿規定の配布、2012年、横浜で開催されるJSOT学会総会のパンフレット、2013年、仙台で開催されるJSOT・アジア毒性学会共同開催のパンフレットと開催地の仙台や日本の観光資料の配布も行った。PCでは仙台の観光映像を提供した。



写真2 JSOTのブースの様子。フロントデスクにはJTS誌を含む配布資料、日本の手拭い、ボールペンを置き、PCで仙台の映像を提供した。

初日から、お土産として用意した日本手拭いの人気は上々であり、用意した枚数が短時間に無くなってしまふ盛況ぶりであった。日本の研究者の方々は、JSOT がブースを出しているのかと、やや驚きの表情をされつつも何度となく立ち寄っていただけた。ブース奥にイスが用意されていたため、休憩所としての利用や、ポスターを見られる間の荷物置き場としての利用など、いろいろな使われ方をされ、日本の先生方にも大変な好評を博した。さらにブースに立ち寄られた先生方も積極的に資料の配布や学会の宣伝に自主的にご協力して下さった。



写真3 ブースに立ち寄っていただけた先生方。前列左より、佐藤先生、野村先生、後列左より、白神さん（JSOT 事務局）、堀井先生、菅野先生。
（上記の先生以外にも多くの先生方にお立ち寄りいただき、学会宣伝活動にご協力いただいた）

JST 見本誌についても準備した冊数はすべて配布し、JST への投稿要項については、ポスター会場が近かったことから、演者等に出張配布するなど、3日間のJSOTの学術広報活動も成功裏に幕を閉じることができた。近年、JST 誌はインパクトファクターが付くまでに成長を続け、毒性学術誌のメジャーを狙っている。今回の活動でさらに多くの外国の方々からの投稿が増えることを願っている。

最後に、SOTが幕を閉じた10日の深夜、日本では東日本大震災が起き、多くの方々が犠牲になられた。我々、JSOTメンバーも2012年に仙台で開催されるJSOT・アジア毒性学会を宣伝し、海外の研究者の皆様にもSENDAIの印象は伝わったものと考えられる。2011年の横浜での総会もさることながら、2012年の仙台、東北で開催されるJSOT総会を成功させてこそ、日本の復興をもアピールできることになる。是非、1年と少しに迫った東北での学会を成功したいという願いを持って本報告を終りとしたい。